

資料紹介

乱歩と帽子「調和」へのこだわり

入山 洸希

今年度、乱歩邸では資料公開の場が増えた。その展示の一つが、乱歩が生前所持していた多くの帽子である。乱歩邸に残る多くの遺品の中、乱歩本人の色が濃く出るものがあるが、帽子はその一つと言っても差支えないだろう。その数は四〇を超え「Rampo」の刺繍が入った特注と思われるものまで残っていた。その並並ならぬ熱量はエッセイとしても残されている。昭和二十八年に発表された「外套と帽子」がそうだ。タイトルからもわかるように内容は前半が外套、後半は帽子についての乱歩の求める「調和」が述べられている。その冒頭部分はこうだ。

帽子は外套以上の難物である。洋装和装にかかわらず、私は昔から帽子には困り抜いている。ソフトというやつが、どうも私には似合わない。私は猫背で頸が短いからである、鳥打帽も同じ理由で似合わない。和服の場合は宗匠頭巾でもよいのだが、それなら十徳でも着ないと調和しな

い。ペレー帽も私には具合がわるい。無帽主義は、頭のはげている私には論外だし、そうでなくても、余程頭髪が豊かで、顔よりも大きくデコレートした人でないと、外套を着た場合の無帽は、頭の方が淋しく貧弱な感じになる。

短い文章だが乱歩が帽子選びに苦悩していた様子が伺える。乱歩はどうも「調和」への意識が強かったのだろう、几帳面さが服装にも影響を与えていると見ることもできようか。実際に整理を進めると種々多様な帽子を所持していたことがわかった。言及のあった、ペレー帽やソフトも残されていたが、やはり目を引くのは先にも紹介した「Rampo」の刺繍が入った鳥打帽である。しかし、これは単なる鳥打帽ではない、言わば乱歩特製「鳥打帽」なのだ。エッセイの続きで「調和」している例を乱歩自身が二つ挙げている。芝居で徳山左衛門尉を演じた時に被った前方の見透せる「編笠」と、将校マン

トに合わせた「学生帽と鳥打帽のあいこのこ」がこれにあたり、この「あいのこ」は乱歩特製のもので、説明が付け加えられている。

文章では現わしにくいですが、鳥打帽の山の部分が、普通のように扁平でなくて、上方にもり上がっている（そのために真綿の芯を入れた）。そしてその下に学生帽のよりは幅の狭い帯状の部分があり、ヒサシがある、という格好なのだ。

刺繍入りの「鳥打帽」はまさにこの系譜に当たるものなのである。エッセイでは乱歩はまだこの「鳥打帽」を作る構想を抱いていた段階であったが、実際に形として残されているものがこの「鳥打帽」であろう。

エッセイと実物としての資料が結びついたこともあり、この「鳥打帽」を見つけた時にはとても興味深いものであった。この「鳥打帽」も画像として添えているので、是非「文章では現わしにくい」帽子を一度頭に思い浮かべてから見て頂きたく思う。

入山 洸希

